

2024 優勝エッセイ賞
佳作(GⅢ)
受賞作

最期の日々

もりもと きみひさ
森本 公久



受賞のことは
父と子の関係は微妙なもの。仲良く酒を酌み交わせる親子なんて少数で、私もそんな経験はありません。むしろ思春期のころからずっと反発していた気がします。しかし今になって振り返ると、競馬が好きになったこと、野球に夢中になったこと、どれも父の影響でした。50歳を過ぎ、駿やシミの増えた顔を鏡に映すと、父に似てきた気もするし……。遺言も残すことなく逝った父と向き合った最期の7ヵ月、我々をつないでくれた競馬に感謝しています。

プロフィール
20、30代はスポーツ紙記者として競馬と関わり、退職後は一ファンに。ほかの趣味は走ること、山を登ること。動物は大好きで、今は保護猫2匹と暮らしています。

ステレンスのトレイに置かれたそれに現実感はなかった。「これが摘出したお父さんの腸です。あと半日、いや数時間遅かったら、亡くなっていましたよ」

外科医は血のついた手術着のまま淡々と話し始めた。

2019年12月21日の朝、同居する76歳の父が倒れた。

末期の大腸がんで、午後には緊急手術を受ける慌ただしさだった。ぎりぎり一命はとりとめたが、外科医は「来年の桜を見るのは厳しいでしょう」と付け加えた。

残された時間をどう過ごせば、父にとつて安らかなのか。自宅から近い緩和ケアの施設に空きがないかと検討していたところ、年が明け、新型コロナウイルスが猛威を振るい始めた。

「ホスピスに入るとコロナが収まるまで面会すらできなくなると思います。お父さんの余命を考えると、それっきりになるかも。ご自宅での看取りを検討してみませんか」と担当の看護師は言った。

自宅ではホスピスのように行き届いたケアはできないだろう。せつかくの提案にも、かえってつらい思いをさせるのではないかといったんは躊躇した。しかしその後の彼女の言葉が私の背中を押した。

「お父さんはお家に帰りたい、ハッピーちゃんでしたっけ、大好きなわんちゃんに会いたいといつも泣いていらっしやるんです」

穏やかで我慢強い人だった。がんが進行していたのだから、常日頃、痛みを自覚していたはずだが、いつ体調を聞いても「大丈夫」と繰り返すだけだった。そんな父が家族のいないところでとことん弱っていたと知り、やっぱりひとりぼっちで逝かせるわけにはいかないと思うに至った。

1月下旬から始まった介護で最も苦勞したのは、ストーマ(人工肛門)装具の交換だった。切除して短くなった腸はへその斜め上に開けた穴につなげられている。そこに貼り付けたビニール製の袋に便がたまっていく。交換作業は大体数時間おきに必要で、妻や足の悪い母には任せられず、コロナ禍で在宅勤務が可能になった私がその役目を担った。

便の匂いが充満する寝室で父と向き合う日々が続いた。元気なころは柴犬のハッピーを撫でながら、プロ野球や相撲をテレビで見るとの楽しみになっていた。退院後はテレビをつけることもなくほとんどベッドに横たわっていた。装具を交換する間、何を話しかけても生返事ばかりで、まるでこの世のことに興味がなくなったかのようだった。桜が散っても父はまだ生きていたが、そのころから腹水を抜く回数が増えた。肺に転移したがんの影響で、たびたび咳き込むようになった。

その日、父の寝室に行くと、装具の貼り付け方が甘く便が漏れ出していた。窓を開け、慌てて着替えさせた。「ごめん、臭かったやろ」と私は詫びた。父は何も答えず、うつろな目で天井を眺めるだけだった。

ああ。やせ細り、ただ死を待つだけのようなの姿に、思わず大声が出た。もう無理だ。なにもかも放り出したい。手術以降、腹の底に抑え込んでいた感情が一気に噴き出してしまった。

動悸を抑えようと大きく息をしながらテレビのリモコンに手を伸ばした。14型の小さな画面には、ゲートの裏で輪乗りをしている馬たちの様子が映し出された。

(そうか、きょうは皐月賞か)
スポーツ紙の競馬記者をやめて14年たったが、遠巻きに競馬は見続けた。ただ父が倒れてからというもの、そんな余裕すら無くなっていた。

呻きのようななすすべた音を聞き、はっとして振り返った。「一番人気はどの馬や？」と父は声を振り絞った。「コントレイルっていう馬ちゃんかな。確かまだ1回も負けてないし、ここを勝ったら三冠まで……」

「なんで誰もいないねん」
遮るように父は言った。無人のスタンドは確かに異様な感じがした。

「コロナのせいや。訳のわからん病気がはやってしまったあ」

そのときふと、誰もいないスタンドのベンチに、背中を丸めて座っているふたつの影が見えたような気がした。それは疲れで霞んだ目に映った、そろいのドカジャンを着た父と私の幻影だった。

あれは1982年の皇月賞、中学2年の私は父に連れられ初めて中山競馬場に行った。足元には無数の外れ馬券が散らばっていた。たばこの煙が、スタンドを埋め尽くした人々の頭上を雲のように漂っていた。

前年、取引先に騙されたのが原因で、父の事業が破綻した。関西から小さな車に家族4人と猫2匹、積めるだけの荷物を積んで、千葉にある四畳半二間の古いアパートへと流れてきた。転校先で私は関西弁をからかわれ口数が極端に少なくなった。クラスにも部活の雰囲気にもなかなかじめず、ずる休みを繰り返した。

父は慣れない日雇いの土木作業で腰や肩を痛めた。毎晩痛みに呻いていたが、そんな父をどうしても労わることができなかった。寂しさや不安が父への恨みに変わり、言葉を交わすことすらほとんどなくなった。

ふたりで出かけるのは、小学生のころに和歌山の川へ鮎釣りに行って以来だった。苦労しながらも生活がいくらか上向いてきた父にしてみれば、息子との間にできた深い溝を何とか修復したかったのだろう。「中山はまだ寒いから」と嫌がる私に無理やりドカジャンを着せて、連れ出した。

売店で父は紙コップのホットコーヒーをふたつ買ってくると、ひとつを私に手渡した。

「何が勝つと思う？」と父はぎこちない笑みを浮かべた。ミルクのたっぷり入った甘いコーヒーをすすりながら専門紙を眺めているとアズマハンターという馬が目についた。気になったのは戦績や厩舎コメントではなく、生まれたのが千葉というところだった。

縁のない土地に来て、それでもそこで生きていくしかなくなった私は、北海道生まれのエリートの群れに挑むアズマハンターに自分の孤独を投影したくなった。

しかも1番人気のハギノカムイオーと2番人気のロングヒエンは関西馬だった。この2頭にアズマハンターが勝てば、私も郷愁からくる心細さを断ち切り、前を向けるような気がした。

父は自分で予想した馬券に加え、アズマハンターの単勝を3000円買ってきた。

「お前の応援するその馬が勝ったら、好きなもの買うたる」

転校先で私は野球部に入ったが、掌の部分が擦り切れて穴が開いたグローブを使っていた。ひよつとしてずっと憧れていた、ミズノの赤カップが買えるかも…直線、アズマハンターが突き抜けた時、私は千葉に来て初めて心から笑っていた。

コントレイルが勝つのを見ながら、父と中山に行ったのはあれが最初で最後だったと思いつ出した。

「強かったなあ。これでダービーも楽しみにになったなあ、一緒に見ようか」

努めて明るく私は言った。だが父はうつむいたまま何も答えなかった。余命については聞かれなかったし、こちらからも取って触れなかった。それでも沈みゆく船に乗っているような恐怖を感じながら、命の秒針の音を聞いていたのかもしれない。その後さらに容体が悪化していった父は、ダービーのころには意識が混濁するようになった。そして7月上旬、自宅で息を引き取った。

葬儀場の霊安室へと移す前に、父のひげを剃った。介護士さんたちには随分お世話になったが、ひげ剃りだけは「息子にやってもらおう」と言い張っていたそうだが、「ひげって、死ぬ間際まで伸びるんだね」

T字カミソリを冷たくなった肌にあてながら、隣にいた妻に言った。父が死んでも、私は不思議なほど冷静で涙も出なかった。

「精一杯、ずっと介護したんだから、その間にゆっくりお別れできたのよ」と妻はうなずいた。確かに千葉に来て以来、父とあんなに長い時間向き合ったことはなかった。

「それにしてもさ、親父から遺言も、ありがとうの一言もなかったなあ」

「照れ臭かったのよ。父親と息子ってそんなものでしょう。私にはいつもありがとうって言ってくれていたよ。あなたの気持ちもちゃんと伝わっているって」

遺体運びだすと、主を失った部屋を片づけた。妻と母はクローゼットにたまっていた衣類の整理を始め、私はテレビ台として使っていた木製チェストの引き出しを開けていった。一段目にはメガネと数年前の父の日にあげた安物の腕時計があり、時計を形見としてもらうことにした。二段目には古びた書類の束が入っていた。それをどかすとVHSテープが出てきた。タイトルのいかかわしさに、思わず笑ってしまった。父の名誉のため、母と妻に見つからないようこっそり燃えないゴミの袋に入れた。するとテープの下に茶封筒があった。中には小さく折りたたまれた新聞紙が入っていた。

1992年6月1日付のスポーツ紙の終面だった。ミホノブルボンが無敗の二冠を達成したことを報じていた。それは私が新聞記者になって2年目、初めてダービーのヒーロー原稿を書いたものだった。

私はひとり、2階のバルコニーに出た。父が大切にしまっていた自分の文章をゆつくり読んでいった。

雨粒がひとつ、紙面に落ちた。梅雨が明ければ、父の好きだったひまわりが咲くと思っ